

イネドロオウムシ（イネクビホソハムシ）

○ 被害と発生生態

成虫は、胴体が青藍色で胸部背面が黄褐色の体長約5 mmの甲虫である。幼虫は泥状の糞を背負っているためドロオウムシと呼ばれている。山口県内での発生は、山間地や高冷地など比較的気温が低い地域で見られる。

成虫、幼虫ともイネの葉を加害するが、被害は幼虫のほうが大きく、成虫の被害が問題となることはほとんどない。成虫は、葉の先のほうから葉脈に沿って白い傷をつけ断続線状に食害し、幼虫は、葉をところどころ削るように食害して幅広の白いかすり状の傷を付ける。こうした食害痕が多いと水田全面が白くみえることがある。また、大きな被害を受けた場合も後から遅れて新しい茎や葉が出てくるため、夏期には生育は回復したように見えるが、草丈は短く、茎数は少なく穂数は減少することがあり、コメの品質や収量に影響する。

年間1回の発生で、水田付近の雑草地や山林、枯葉の下に潜むなどして成虫で越冬する。5月上中旬頃から成虫が水田に飛来し葉を食害する。幼虫は6月頃から発生し、新成虫は7月初め頃から発生し、8月頃には雑草に移動して、そのまま越冬する。

○防除方法

（ア）耕種的・物理的防除

- ・早植えを避ける。
- ・多肥栽培を避ける。

（イ）薬剤防除

- ・箱施用剤による防除を行う。
- ・ほ場を確認し、幼虫発生初期（6月頃）に防除する。
- ・低温で曇雨天が続く場合、発生が継続するため、追加防除が必要な場合がある。



イネドロオウムシ成虫



イネドロオウムシ幼虫と泥糞



被害株